



長山篤子・牛山敬子

・四月――

年長組になった喜びで張切った日々を過している子どもたちを観察していたある日。

私たちは、子どもたちの生活の中に落着いた雰囲気が失われていることに気づいた。原因は、年少組の時のクラス編成にあるように思われたが、それが解決されないままに、上のクラスに進んできたようだった。そのためか、遊びにもまとまりがない。そこで何か方法を考えなければならぬと相談し、その結果、一学期間続けて、ラジオを聴かせてみることにした。

楽しい遊びがみんなで行えるようになるため、その刺激になるようなものはないかと、さがす。検討した結果NHK第一放送金曜日幼児番組「ジャングルタロー」を使用することにした。一定の時間（九時四十五分～五十九分）、みんなが揃って、楽しみにして、この番組をきくようになった。家庭で、幼稚園で、テレビばかりに夢中になっている子どもたちであったが、この耳から吸収する経験は、頭の中で、いろいろなことを想像できる楽しさを味わうことができ、すぐにはないが、どうやら落着きをとりもどしてくるようすがみられてきた。この番組をきいた後、話し合いを必ず入れる。

この話し合いも次第に活発になり、更に回が重なるに従って、ジャングルタローの遊びをみんなでするようになった。

・六月——「もうじゅうごっこになる」

この話し合いのあと外に出た子どもたちは、クラスの子ども大勢を集めて、ジャングルジムで、猛獣ごっこを始める。「わにだぞー、たべるぞー」「先生がライオン」と、ジャングルジムの間を逃げまわる鬼ごっこのような遊びが流行した。この頃、この番組で「ジャングルのおまわりさん」という番組を放送し、それが刺激になりまた交通安全と結びつけて、「交通ごっこ」という単元を教師がとりあげ、高速道路、乗物各種が子どもたちの手で作られ、遊びが活発に行なわれた。

・七月——インディアンごっこに発展

「交通ごっこ」が下火になった後も、以前と同じ猛獣ごっこが盛んで、七月の初め、一人の男児と女児が、インディアンを真似をして、猛獣ごっこに加わったのがきっかけとなり、一斉にインディアンの帽子をつくりはじめた。インディアン熱が、年長全体につたわり、インディアンを戦いごっこが盛んになった。ピアノに合わせインディアンの行進などもやってみる。すぐに夏休みに入るのに、インディアンごっこを、運動会と記念事業に発表できるように、二期のはじめとりあげ、教師が計画を練ってみることにした。

単元『インディアンごっこ』

参加人数 年長組 二クラス四十七名(男二十八名、女十九名)

期間 九月二十日—十月十日(十月十日運動会に創作舞踊を発表)

表、十一月三日記念事業展示会に製作したものを発表)

目標○インディアンを遊びを通して、力を合わせてする遊びのおも

しろき、楽しさを味わい、友だち関係を一層深める。

○インディアンの生活習慣をいろいろな方法で知り、日本以外

の国の生活習慣の違いについて関心を深める。

○運動会、記念事業に発表する。

『指導計画』

☆教師の準備

○インディアンのスライド、本、絵はがき、道具を集める。

○インディアンの生活についての知識を本で調べ読んでおく。

○実際にインディアンに逢ってきた人(ボーンスカウトの人々)に話をきく。

○トートムボールのつくり方をならい、インディアンの身につける

ものをかりる。

○グループづくりの人員について教師の考えをまとめておく。

○製作材料をできるだけ豊かにそろえ、室内に用意しておく。

○音楽の選択

☆子どもへの展開の計画

○スライド、絵本、絵ハガキをみて、インディアンの国の自然、生

活習慣を知らせる。

○インディアンごっこをもっと楽しくするため、どんなものをそろえたらいいか話し合う。(予想||トーテムポール、インディアンのテント、やり、たて、帽子、バンド、たいこ、ヘビ、ライオン、ジャングル、カヌー、etc.)

○園庭、ホール、などできるかぎり場所を広く使わせて、力を思いきり発散できるようにする。使用場所||幼稚園全部。

○リズム表現、インディアンのおどりの表現をレコードに合わせてする、ホールに、自由にレコードをかけられるようにしておき、インディアンのおどりを創作舞踊に導く。(できたら運動会のプログラムに入れたい)

○たいこのリズムのとり方を工夫する。

○インディアンのおどりの表現をレコードに合わせてする、ホールに、自由にレコードをかけられるようにしておき、インディアンのおどりを創作舞踊に導く。(できたら運動会のプログラムに入れたい)

○たいこのリズムのとり方を工夫する。

○たいこのリズムのとり方を工夫する。

○たいこのリズムのとり方を工夫する。

七月の末、「インディアン」の行進をリズムの中でとりあげ、九月への橋渡しの役目として印象づけておいた。夏休み後の第一週、教師のしたインディアンの話をきいて、N夫「先生、前やったイン

ディアン」の行進やりたいな」教師「アラ、おぼえているの、どんなのだったかな？」とピアノで行進曲を弾く。(アメリカ民謡、線路工場の歌より)早速全員並んで行進をはじめ。ヤリを持ち上げて「ヤア」と勇ましいかけ声がリズムに合わせてかけられる。教師「今日は、みんなで行進だけではなく、猛獣狩りにもいきましようよ」とあらかじめ用意しておいたレコードを聞かせながら、表現を楽しむ。インディアンの行進曲のメロディーを口ずさみながら入室。ホールにはあってあったインディアンの絵ハガキをみて「これ本物のインディアンかな?」これがたくさん羽根がついているからしゅうちょうだな」といった話し合いが、クラスでしゅうちゅうに行なわれた。

「先生画用紙ない?」と意欲的。何やら作りはじめ。クラスで羽根らしいものを何枚か作りインディアンの帽子を作りあげた。「僕もつくる」「私も」あちこちで帽子づくりがはじまる。降園前の集まりの時「じちゃん、しゅうちゅうで僕は偵察に行くインディアンなんだよ」といった報告が行なわれるまでに、子どもの興味が高まってきた。

☆話し合い

午前中インディアンの風俗生活のカラーズライドを見る。更に実際インディアンの使う帽子、鈴、かざりもの、石づちの実物を見る。子どもは、仲々信じられなく何度も本物なのかと念をおしている。その後、インディアンの生活について話し合いを行なった。

●本当のインディアンは悪者でない。

●力があつて勇氣がある。

●大変な仕事をする……猛獸狩り、おうち作りなど。

●踊りがとっても好きで上手だ。

●しゅう長は一番勇氣のあるりっぱな人だ。

●男のインディアンは猛獸狩りが毎日の仕事。

●女のインディアンは、洗濯と掃除が仕事。その後、みんながイン

ディアンになってみるためにどんな準備が必要か話し合う。

●男のインディアン……帽子、槍、楯。

●女のインディアン……帽子、踊りに使うベルト。

●テント、木、動物、のりもの。

☆製作活動が始まる。

楯に使う厚いダンボールがなかなかきれず文句をいいながらも夢中でやっているH、どうしてもひょうたん型の楯にするのだと、楯のかいてある本を、いっしょうけんめいみている。クレヨンで模様をかきボスターカラーをぬってその上にニスをする。まわりにナイロンテープをはり、うしろに持つ所をつけて仕上げる。ニスが乾くように下駄箱の上に並べて置いたのを何度か見に来たA「先生、うまいでしょ、ほんものみたいでしょ」と楯の本物をみたこともないのに大そう満足なようすでニコニコ。

Y「先生ちょっとみて。この楯ひかかっていて本当にまぶしいから猛獸も恐がるね」と太陽に楯をかざしてみる。翌日、槍を作るためにラシヤ紙と金銀の紙を用意する。一番に登園したS「先生、楯使

っていい」と楯をふりかざして、女の子を追いかけまわす。帽子をかぶり、すっかり声までインディアンになりきっていたが、しばらくして「やっぱり槍が欲しいな」とひとりごと。教師の働きかけで槍作りが始まる。危なくなく、折れずに楽しめる槍ということ。材料を苦心したが結局ラシヤ紙を棒にし、先は画用紙に金銀をはったものをつけてみた。

☆インディアンごっこ

ごっこ遊びに移ってきたのでテントづくりをはじめ。教師がテントの木を組み立てる。子どもたちは布にマジックで絵を描いた。この布を木のわくにはり、ワラを上からかぶせた。テントは二つでき上る。

登園した子どもたちは、かばんをつけたまま、すぐこのテントに入り込み「ワァーインディアンのおうちだ」と大はしゃぎ。槍と楯をもちだして、テントをかくれ家にして早速インディアンごっこがはじまった。テントが二つあるので、二つの部落に分れて遊びはじめた。戦いが主、槍をもって、追いかけてばかりいて、女兒の方から文句がでてしまった。

☆リズム活動

ホールに全員集合。「戦ってばかりいるインディアンはつまらないので、インディアンの仕事を考えましょう」とレコードとピアノを聞き、動きを楽しむことにした。男のインディアンは猛獸狩り、女のインディアンは、おうちの仕事。ピアノに合わせてインディア

ンの行進。続いてレコードに合わせて、猛獣狩りとインディアン
の踊り、女の子の洗濯、掃除などをしてみた。ホールをレコードに合
わせて、汗が出るほどに踊りまわる。表現が活発に行なわれた。N
「先生、やっぱり猛獣がいないとつまらないよ」と提案、翌日教
師が早速猛獣を作り木の上にせた。そして、レコードに合わせて、
自由に踊りまわる。昨日より更に、おもしろ味がでてきた。

☆おはなしくり

このようなりズム表現の中から、子どもたちと、一つのお話に、
まとめてみることにした。男のインディアンは猛獣狩りにでかける
話のすじにすぐ一致するが、女兒の方がなかなかまとまらず苦心し
てしまった。何度となく相談した結果、次のような話になった。

(インディアンの子どもたち) 「ここは遠い国です。この国はイ
ンディアンが仲良くすんでいました。インディアンの子どもたちは
とっても元気がよくて、強くて仲よしです。そしてお手伝いもしま
す。今日も男のインディアンたちは、テントのまわりにすわって猛
獣狩りに使う楯がこわれていないか調べたり、楯をみがいていまし
た。すると、突然「ウォー」とものすごい声が聞こえてきました。
みんなびっくりして、楯と楯を持ってその声のする方に進んで行き
ました。しばらく進んで行くと、大きな木の上に、ものすごい猛獣
がいました。みんなは余りすごい猛獣なのでびっくりしましたが、
みんなで力を合わせて、やっつけることにしました。相談した結果、
木を両方から囲んで、つかまえることにしました。とっても大変な

猛獣狩りでしたが、とうとう猛獣をやっつけることができました。

みんな、しとめた猛獣を囲んで、大喜びで踊りをおどりながら、
お家へ帰りました。女のインディアンは、川におせんたくに行きま
した。おせんたくをしようとする、川のまん中に、大きなワニが
出てきました。おせんたくができなくて困ってしまいましたが、何
もしないでワニは行ってしまいました。そこで安心してみんなでお
せんたくをしました。おせんたくがだったので、おどりをおどった
り歌をうたいながら、お家に帰って行きました。

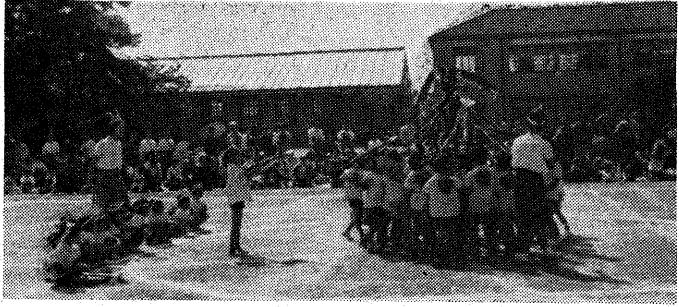
男のインディアンも女のインディアンも「一日よいお仕事ができ
てよかったね」と神さまに感謝して、みんな楽しくフォークダン
スをしました。

お話としては単純であったが、庭に出るとテントを使って二部落
に分れ、それぞれが仕事に出かけたり、お客さまになったり、楽し
い遊びが続いた。リズム表現でレコードに合わせて、このストーリ
ーでやってみたところ、男のインディアンから「先生猛獣の声が入
っていないと変だよ」と発言があつてこの話は、行進曲もレコード
も、猛獣の声も全部、テープレコーダーに吹き込むことになった。

☆運動会のプログラムの中へ

教師がテープレコーダーに、インディアンの行進のピアノとレコ
ード、猛獣の声、解説を入れて、いつでも使用できるように用意し
た。子どもたちが入室し全員揃った所でこのテープをきき、この表
現を運動会の時に広い庭でやってみようと、教師が提案する。

リズム表現「インディアンの子どもたち」もうじゅうがり



「ワァーイ」「うれしい」「恥かしいわ」など反響はさまざま。「いっしょうけんめいやりましょうね」と励ます。その他、インディアンの生活の中から、競技に使用できるものはないかと考えた末、庭で「川に出かける時はカヌーを使って、えものとりだ」と話していた子どものことを思い出して、カヌー競争というのをやってみようと考え、「三人乗りカヌー」という競技を考案した。カヌーの材料は、大きなダンボールの底をぬいたもの。これをカヌーの型に整え、その上に包装紙を幾重にもはる。この上からボスターカラーをぬり、ニスをかいた。カヌーの中には三人ずつはいり、力を合わせて走り離れた所にあるテントの中の宝物をもってくる。子どもたちは、幾度も幾度も夢中になって練習していた。

さらに、インディアン部落の入口に使用するために作る予定だっ

たトーテムポールも、運動会時の入場門に使用することになった。これも、ダンボールを使用、四面に顔を描き、十二コつみ重ねる。このようにして、インディアンごっこは、意欲的に運動会の準備として、形をかえて行なわれるようになってきた。

十月十日、このようにして迎えた運動会は活気にあふれ楽しき一ぱいなものだった。園のホールや庭とは勝手が違い、広い運動場で、インディアンの子どもたちは思いきり、あばれまわることができた。

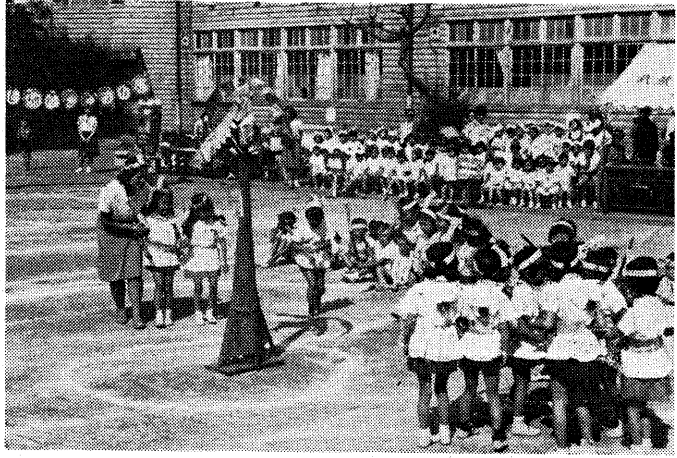
運動会が終わった後もしばらく、テント、楢、カヌーを使って遊びが継続した。

☆オペレッタで

しめくくり



競技「三人のりカヌー」テント



といろいろ考えた結果、タルを借り、これにボスターカラーで色をぬりニスをかけて、使用することにした。タルであったがなかなか良い音が出る。

今でもこの時おぼえたメロディーを口ずさみ「危いふせろ」「矢がとんできた」などうたいながら遊んでいる。このオペレッタは本

長く続いた遊びだったが、教師の計画としては、十月の末で、オペレッタ「インディアンのおはなし」をしめくくりとして、きり上げることにした。オペレッタでは、タイコに人気が集中、たたき方、リズムのとりに興味もたれた。このタイコは、子どもたち

園創立三十周年記念事業に使用した。インディアンごっこに使用した作品なども展示会に発表したことをつけ加えておきたい。

『反省と評価』

ラジオを聴くことから、この活動がはじまったわけであったが、教師の単元活動として、きり上げるにあたって、子どもたちの姿を顧み、反省してみた。

四月に「遊びにまとまりがない」「落ち着きがない」といった評価から、ラジオを聴きはじめていたのであったが、一所に全員がそろって静かに話をきき、それが刺激となって遊びを發展させたという経験は、遊びの中に規律がみられるようになり非常に落着きが出てきて、とてもうれしく思った。よい効果があったと思っている。

☆インディアンごっこの評価

①活動的な遊びとして、子どもの生活と、非常にピッタリしていたように思う。狭い庭や、ホールを、充分に利用し、力いっぱい遊ぶことができた。

②男児の活動として、ピッタリしていたが、特にこのクラスは女児数が少ないので、女児の方に不満がみられた。

③一学期の終りにこの遊びが始まったので、途中の夏休みをはきみ、単元として、期間的にとりあげにくかった。特に運動会、記念事業に発表という計画をたてたため、最後の方の創作舞踊は無理にひっぱった感じがした。

④ インディアンの実際の生活を遊びにとり入れ、力を合わせてする仕事が多いことを経験し、けんかが非常に少なかった。

⑤ 製作活動が非常に意欲的であった。

⑥ インディアンへの神に対する習慣に非常に興味をもち、キリスト教主義の幼稚園として、しばしば、とまどいを感じるとともに、最初の取り扱いにもっと注意すべきであった。

⑦ 日本の国以外の生活習慣に興味を示すようになった。

⑧ 期間中、年長二クラスがほとんど合同で活動したので新しいグループづくり役に立った。

⑨ 全体の動きの指導におわれやもする、問題の子どもの指導に手がまわらなく、手落ちのところができてしまった。

このあと、続いて異なった遊びが二つほど意欲的に発展したが、楽しかった遊びの思い出として子どもたちは今もインディアンごっこをあげている。

(武蔵野相愛幼稚園)

年間をとおして幼児を眺めていますと、組としてのまとまりも、また一人一人の生活の流れにおいても波があります。今まで扱いきらなかった人が、いやに扱いやすくなったり、逆に落着かなくなってしまう時期があります。

こういう場合、よいふん囲気にするべく、何かの手段によってその気を転換するように考えます。それを何の材料に求めるかは環境などによって異なるでしょうが、年長組の場合は、私もラジオの聴取ということをとりあげて、「まあ、役に立ったのではないかしら」と同じように思った経験が二、三回あります。

何しろ根本的には、全然違う種類のことに興味をもたせるように転換してしまいうことが効果があるようです。自分の経験とてらしあわせてみてそれを再確認しました。

また幼児は何を材料にしても楽しく遊べるものです。それに加えて、その遊びの目的がはっきりしていると、その行動に一層はりができます。そして遊びが次々と発展していき、教師が予想していたこと以上、いや想像もしなかったような創作的な遊びに発展してきます。インディアンについてもそのとおりで、話を聞いたり、本で見たりという知識に、スリル感とか、実際には見たことのないものへの興味などが加わっておもしろく発展させることのできる題材です。また、他の人にインディアンであることを分らせるために、それらしいものを身につけたりしなければならぬので、おのずから絵画製作の活動も展開されてきます。それから進んで、インディアンらしい挨拶や、話し方や、動きなどもでてくるというわけで、いろいろの領域が混然ととけ合った好ましい活動になっていきます。

このように一体となった活動こそ、幼稚園教育の本来の姿ですし、幼児にとっても、望ましい経験活動が促進されていくわけです。

村 田 修 子 (お茶の水女子大学附属幼稚園)